

ワーグナー協会関西例会概要

「トリスタンとイゾルデ」の和声の特異性とドラマとの結びつき

講師 三澤洋史

第1部「トリスタンとイゾルデにおける和声法の独創性について

第1章：和声学への初歩的な案内

ある音が鳴って、次にそれより完全5度上の音が鳴ると、人は緊張を感じる。

反対に、完全五度下が鳴ると、人は安心し弛緩を感じる。

この性質を利用し、西洋音楽は **dominor** 「支配する、統治する(ラテン語) する五度」をドミナントと呼び、これを中心として、調性音楽における機能 and 和声法を築き上げた。

The diagram shows a sequence of chords in 4/4 time. The first two chords are labeled 'Tonica' and 'Dominant'. The first chord is a C major triad (C-E-G) and the second is an F major triad (F-A-C). The next two chords are labeled 'T', 'S', 'D', and 'T'. The first is a C major triad (C-E-G), the second is an F major triad (F-A-C), the third is a C major triad (C-E-G), and the fourth is an F major triad (F-A-C). Below the notation, the relationships are described: 'ドからソ 緊張関係' (D to S, tension relationship), 'ソからド 安心、弛緩' (S to D, relaxation), and 'Sub-dominant'.

フーガ：主題に対する模倣の応答は完全5度上

ソナタ形式：第2主題は第1主題の完全五度上の調性

「全ての音楽はドミナント（V属和音）に向かう弾道だ」エルネスト・アンセルメ

古典派音楽は、明確な調性感を持っていたが、ロマン派になると、和声連結に伴う色彩感や気分の変化の方に意識が集中し、むしろ調性感をぼかす和音が好んで使われ始める。

調性感をぼかす和音：減三和音 減七和音

The diagram shows two staves of music. The top staff shows a sequence of chords: Am, F#dim7, Fdim7, Am. The bottom staff shows a sequence of chords: Am, B7(9), E7(9), Am.

ワーグナーの場合：minor sixth これが「トリスタン和音」

The diagram shows two staves of music. The top staff shows a sequence of chords: Am6, Am6/F#. The bottom staff shows a sequence of chords: Am6, Am6/F#.

第2章：ワーグナーの和声法

トリスタン和音について

シューマン作曲「詩人の愛」から、第1曲目「麗しの五月」

ワーグナーがこの曲によって「トリスタンとイゾルデ」前奏曲を発想したという証拠は何もないが、ロマン派に入って、すでにこのような発想の楽曲が生まれていたことは注目すべきである。

この曲は嬰へ短調の調性を持つが、4度和音から属7和音への繰り返しから始まるだけでなく、なんと全曲を通して主和音が一度も出てこない。

IV V7 IV V

Bm(add9) C#7 Bm(add9) C#7

トリスタン和音の新しさについて

イ短調のメロディーから入るが、それを支える和声は **Doppeldominant**(属七和音の属七和音) から **Dominant** (属七和音) に流れて行く。主和音には行かない。オーボエの G# のメロディーは半音上がって A に解決するが、長く引き延ばされているので、偶成的に響く和音 (下から F B D# G#) が、聴衆の耳に残る。これが「トリスタン和音」である。これは機能和声法の法則にギリギリ沿っている。

「トリスタン和音」

Vc. Ob.

Fm7(b5) B7(b5) E7

G#m6 F

古典的和声進行に全くあてはまらない進行

前奏曲は、比較的保守的な和声進行をする。しかしその後、ワーグナーは多くの個所で、従来の和声進行に全くあてはまらない進行を行う。とはいえ、それらは独特の情緒や表現性を見せ、無調的なモノクロの世界とは真逆である。

Isolde

Tri - stan! Ha!

D7(b9) Fm6

Tristan: まだ光は消えていなかった この家にまだ夜は訪れていなかった
 Noch losch das Licht nicht aus, noch ward's nicht Nacht im

7 イゾルデは生きて そして目覚めている
 Haus: I - sol - de lebt und wacht; sie

第2部「トリスタンとイゾルデ」鑑賞の実践

第1章：全体を通しての音楽的コンセプト：

1) 前奏曲と各幕の冒頭部分の音楽的充実

ワーグナーは、「ニーベルングの指環」4部作では序曲及び前奏曲を避けたが、楽劇「ジークフリート」を中断して作られた「トリスタンとイゾルデ」及び「マイスタージンガー」においては、両方とも長い前奏曲を置いている。また、「リング」の後の「パルジファル」でも前奏曲を復活させている。

むしろワーグナーから影響を受けたR・シュトラウスやプッチーニなどが、開始と共に直接ドラマに入っていくことを見れば、ある種の退行現象のようにも見える。しかし、ワーグナーは、自分の音楽的アイデアを事前に提示し、理解してもらった上で、音楽とドラマを味わってもらいたかったようだ。

前奏曲だけでなく、各幕の冒頭部分にもそれが顕著に表れている。

2) 裏歌及び舞台裏からの音楽の重要性

各幕とも、導入部分から“裏歌”及び“Banda と呼ばれる舞台裏の楽器”が活躍する。この使用法は他の作品と比べてかなり意図的である。

恐らく心理劇としての性格が強いこの作品において、暗示的意味を持たせるためと思われる。

第1幕：水夫の歌(イゾルデの運命)

トランペット・アンサンブル(コーンウォールへの到着)

第2幕：舞台裏のホルン・アンサンブル(夜の狩り)

ブランゲーネの警告

第3幕：イングリッシュホルン(失望、落胆)

ホルツトランペット(イゾルデの到着、喜び)

3) ライトモチーフのあり方

「ラインの黄金」でライトモチーフ(指導動機)を編み出した時には、それぞれの登場人物に対応したものや具象的なものが多く、音楽の言語化、記号化という感じであったが、「トリスタンとイゾルデ」においては、変化に富んだ和声を伴った「気分」や「雰囲気」を表現するものが多く使われた。

両方とも「死のライトモチーフ」

The image shows a musical score for two vocal parts. The left part is in 3/4 time, and the right part is in 4/4 time. The lyrics are 'Tod - ge - weih - tes Haupt!' and 'Tod - ge - weih - tes Herz!'. The score includes piano accompaniment with chords: Ab/C, A, Fm(Ab), D7(9)/Ab, G7. The right part includes chords: C7, Dbdim7, Eb7, Db, E7.

第2章：聴きどころの鑑賞（解説付き）

第1幕：Tristan! Isolde!（媚薬を飲んだ後から終幕まで）

Tristan Isolde Brangäne Kurwenal Männerchor

第2幕：O sink' hernieder「降りてこい、愛の夜のとばりよ」

Tristan Isolde Brangäne

So stürben wir「そうであるならば死のうではないか」

Tristan Isolde

Da kinderlos einst「妃が子を残さずに逝ってしまったために」

König Marke

第3幕：Mild und leise wie er lächelt「穏やかに、静かに、彼は微笑んでいる」

Isolde

終曲の意味「辿り着いた解脱の境地」

ワーグナーが「トリスタンとイゾルデ」の構想を練っていた時、すでに終幕の調性(ロ長調)と終わり方は決まっていたように感じられる。

ここには、全ての制約からの解脱がある。

The image shows a musical score for '憧れの動機' (Longing Motif) in 4/4 time. The score includes piano accompaniment with chords: G#m6/B, Em/B, B Maj. The score is marked with 'pp' (pianissimo) and 'Em6'.